



# 羽ばたけ



田辺 ふみ

恒星の光を背に感じながら、私はじっと小惑星にしがみついていた。小惑星に取り付いてから、もう十日になる。

もう少し先に行こうかと悩んだのだが、うっかり進みすぎると、親との連絡が取れない距離になってしまう。ちょうどいい小惑星が見つかったので、次世代に私の任務を託すのには今がいいタイミングなのだろう。

自分と同じ探査機を作る。カーボン繊維のモノコックボディ。AIチップ。それから、羽。

自分の薄い大きな羽は一旦、吸収した。それに小惑星から取り込んだ炭素や窒素を加え、六角形の輪をつないでいく。つないで、つないで、大きな分子にし、薄い膜を作っていく。難しい作業だが、羽ができていくのには達成感がある。

ベビー服を編む母親の気持ちとはこういうものだろうか。

子供にはどんな名前をつけようか。チルチル、ミチル。一郎、二郎。空良、海人。

もちろん、これは正式の名ではない。正式の名前はこうだ。

私の親は01001.....1、私はその二人目の子だから、01001.....11。私の子供は01001.....110と01001.....111になる。末尾に0と1の数字がどんどん付け加えられていく。私たちの子はいつでも二人。そして、二進数の名前。桁数を数えれば何世代目なのかがすぐにわかる。

私のオリジナルの名前は千鶴と言う。私は彼女が十五歳の時にコピーされた人格をベースとしたAIだ。千鶴は体が弱く、ずっと、病院で過ごしていた。だから、私は起動された時、すごくうれしかった。

探査機となって、広い宇宙を羽を広げて飛んでいく。どこまでも、どこまでも。

『未来に向かって、羽ばたけ』

それが探査機のAIのベースとなる人を募集するキャッチフレーズだった。人間を送り出すより簡単で安上がり。その上、体の不自由な私たちに夢を与えてくれる。すばらしい計画だと思っていた。

あれから飛び続け、様々な知識を得た。考える時間はたっぷりあった。

それで徐々に気づいた。あの計画で志願者が体の不自由な人間に制限されていたのは、夢を与えるためではなく、孤独に強い、忍耐強いと思われていたからかもしれない。

一人で飛び続けるから孤独だし、人間としての楽しみは得られない。それでも、私は楽しかった。私の探索では、人間が居住可能な新天地を見つけることはできなかったけど。

私の子供達はどうなるのだろうか。

私は二つのAIチップに志願者全員の仮想人格をコピーした。この中に全員の仮想人格が入っているとは信じられない小さなチップだ。その中のまだ起動したことがない仮想人格を選択し、AIを一つ起動する。それから、別の仮想人格を選択し、もう一つ起動する。それが子供達だ。

「おはよう、出発の時間よ」

心の中でそう呼びかける。

探査機はゆっくりと羽を広げていく。光子を受け、少しずつ小惑星から離れる。それぞれの軌道は私の今までの探査方向を二等分した中心を通るように設定してある。

私は子供達を見守りながら、小さな傘を広げた。今までの羽と同じ素材だが、今度は小さい。傘に光子を受け、小惑星から少し離れる。新天地が見つかったら、子供は自分の名前を発信することになっている。この傘はそれを受信するためのアンテナだ。もし、受信したら、自分の親に向かって、同じ情報を発信する。親はまた、自分の親に向かって、発信する。それを繰り返すと、のろしのように地球まで情報が届くことになる。そして、最後に発信した親の位置と届いた名前から、新天地がある方向がわかるのだ。

ただ、地球からはもう何万光年も離れている。技術が進歩して、もう別の手段で新天地を見つけているかもしれない。

あるいは、信号を受ける人はもういないのかもしれない。その可能性は計算上、とても大きい。もし、人間がいなければ、見つけた新天地は私たちAIのものにしても構わないだろう。それなら、私たちも人間のように進化の可能性を求めるべきではないだろうか。

そう考えて、私は子供達のAIに手を加えてしまった。何か所か、ランダムに私の人格の一部を加えたのだ。

まるで、人間が子供に自分の遺伝子を伝えるように。

それで、本当に進化の道が開けるとは限らない。そんなことはわかっている。ただ、自分の子供が欲しかっただけかもしれない。

軌道を修正するため、羽を動かす子供達に心の中で呼びかける。

子供達よ、未来に向かって。力強く羽ばたけ。